

## 淡輪城(淡輪邸)(泉南郡岬町淡輪字城の藪)

淡輪城址は淡輪部落の内にあり、今は民家田圃と化したれども、本丸の址は字を城の藪と呼びて一面の竹藪を為せり。広さ式反歩許、土手を繞らして隣地より小高く、東西の二方に堀の址残れり。城は淡輪氏の據りし所なれども、里伝に依れば同氏以前已に城あり、後同氏之に據りしものなりといふ。淡輪氏の裔たる本地本山林吉氏の家譜に依れば、淡輪氏は其の先佐藤忠信に出て、忠信は畠山重忠と親昵なりしを以て遺言して其の幼児を重忠に依頼し、幼児は重忠の保護に依りて成長の後、小治郎重治と稱し、泉州日根郡を領せしめらる、依て淡輪を氏と為せり、是れ淡輪氏の祖なり。其の子彦四郎重信より太郎左衛門重昌・左衛門五郎入道正圓重元・助太郎重氏・彦太郎助重（助重は正平九年右衛門尉従五位下に叙せらる）・左衛門太夫長重・次郎左衛門有重・左衛門太郎隆重・佐渡守昌利・六郎兵衛重氏・因幡守重正（二男次門昌信・其子次郎左衛門信重家名を本山と改む、即ち本山家の祖なり）を経て大和守良重に至る。累葉中、右衛門五郎入道正圓は元弘年中、助太郎重氏は建武・延元年中、彦太郎助重以下は貞和・観応・正平以来応永年間に亘りて、或は官軍に属し或は賊軍に投じて武威を振ひしが、良重は後名を隆重と改め、徹斎と号し、天正年中の人にして、其の所領は六萬石なりしと里伝せり。徹斎に二男一女あり、長男は新兵衛重利といひ、次男を六郎兵衛重政といふ。長男は紀州侯に仕へ、女子こよは関白秀次の妾となる（女子は波有手村なる後藤六兵衛政義の女を養女とせるものなりといふ）。然るに其の女関白秀次の妾となり居りしが為め、秀次の文禄四年七月高野に自裁するに及び、秀吉に其の所領を没収せられしかば、淡輪氏滅びて城は墟となれり。而して秀次の妾となりし徹斎の女は、聚楽第に入りてお小督局と呼ばれ、秀次の胤を宿して女子を挙げ、秀次の自裁後三十一才を以て京都三条河原に於て斬らる、其の辞世は左の如し。女子は益田少将・富田左近将監に救はれて、密に波有手村なる後藤六兵衛興義（政義の嫡子お小督局の兄）の許に送られ、同家に成長してお菊と呼び、二十歳にして紀州の代官山口喜内の嫡子兵内に嫁せり。時は恰も大坂役の起れる際にして、同家は意を大坂方に傾け夫兵内は大坂城に入りて戦死し、父喜内は国にありて浅野家を謀りしかば、其の事露頭して同家一族悉く刑死せらるゝに及び、お菊のみは赦されたるも、自ら望みて元和元年六月六日南穂村の河原に刑せらる。又六兵衛重政も大坂城に入りしが、同年四月二十九日当国樫井川に於て浅野家の兵と戦ひ利あらずして討死せしも、淡輪氏の嫡伝は今も紀州にありといふ。

大阪府全志による

ここより南東一帯の約千五百平方メートルの敷地は「城の藪」と呼ばれ、この地を領した淡輪氏の邸跡であった。淡輪氏の祖父で戦死した佐藤忠信の子小治郎重治で、元久年間一二〇四年頃この地に地頭として住みついたものとされている。南北朝の戦乱の世に功があったことが淡輪文書に残っている。戦国時代、淡輪徹斎の女「おこよ」は豊臣秀次の妾となって小督の局と呼ばれたが、秀次の死に連座して三条河原で斬首された。また徹斎の次男六郎兵衛重政は大阪夏の陣の前哨戦「樫井川の合戦」（元和元年一六一五年）で塙団右衛門とともに壮烈な死を遂げた。

阪南ロータリークラブ現地説明板による

